

学校教育目標



須和田が丘

夢 に向かっていく生徒
命 を大切に作る生徒
絆 を互いに深め合う生徒

令和3年度
学校だより No. 34
令和4年3月1日

市川市立第二中学校
校長 石田 清彦

ホームページ <http://www.dai2-tyu.ichikawa-school.ed.jp/>

学校評価の結果について

1月には学校評価へご協力くださりまして、ありがとうございました。回答率は約66%、自由記述の記載率は約14%（全体比約9%）でした。

アンケートの結果は、2月18日開催の第4回学校運営協議会でご協議いただきましたので、その意見を付して、後日、「学校評価の結果」として保護者の皆様にお配りいたします。今回は、「アンケート結果の分析及び学校運営改善の方向性」に加えて、自由記述についても、学校運営に関わる主な内容については、学校の考え方を示しています。このうち「確かな学力」については、「自由進度学習」に関するご意見が多くありましたので、以下に学校の考え方を示させていただきます。

自由進度学習の考え方

今の日本の教育は、これまでになかった大きな変化に直面しています。新学習指導要領の実施をはじめ、GIGAスクール構想によるICT活用の本格化など、昭和から続く学びの風景が一変し、子どもたちが生きる未来はまったく違った世界になっている可能性が高いと言われています。

このような中、中央教育審議会は答申を出し、全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が、令和の日本が目指す教育の姿だと言っています。

個別最適な学びは、指導の個別化と学習の個性化に整理されます。指導の個別化は、支援が必要な子供により重点的な指導を行うことや、特性や学習進度等に応じて指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行うことで、学習の個性化は、子供の興味・関心等に応じて、一人一人に沿った学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することです。

一方、協働的な学びは、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、子ども同士で、あるいは多様な他者と協働しながら必要な資質・能力を育成することや、集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かし、よりよい学びを生み出すことです。

生徒が主体となる自由進度学習は、その方策の一つと考えています。

自由進度学習では、授業時間のはじめに生徒が「めあて」を記入し、計画内容に沿って学習を進めていきます。めあてなどはGIGAスクール構想で配付された1人1台のタブレットで作成し、教材や学習進度はそれぞれに任されています。

分からないことは友達と協力して教え合い、授業の最後には、学んだことや考えたことを振り返り、計画表に記入します。

これを繰り返すことにより、自分の学び方がつかめてくるのです。

実際に取組を進めている先進校では、このサイクルを繰り返すうちに、一斉授業時の3分の1の早さで単元を終える生徒も出てきたと言います。また、進度の早い生徒は時間に余裕ができるので、発展的な問題を解いたり、自分で問題を作り出したりと、より学びがフレキシブルで深いものになったそうです。

一方で、理解に時間がかかり、進度の遅い生徒もいます。しかし、子どもを「信じて任せて待つ、支える」ことにより、自分のペースで学習ができるようになり、徐々に理解も速くなってきたそうです。

このような学習方法は、「履修主義」から「習得主義」への転換でもあります。

現在の学習は履修主義といって、教科ごとに年間の「標準時数」が定められ、時間によって学習が進んでいきます。このため、現在学んでいる内容が分からないまま次の単元に進んだり、その時間の学習内容をすっかり理解しているのに勝手に次に進むことができなかつたりします。

裏面に続きます

しかし自由進度学習は、毎時間のめあてや課題を事前に可視化しておき、生徒はそれを基に自分のペースで学んでいくので、その時間の内容が分からなかったり苦手だったりする場合には、時間をかけて学ぶことができます。一方、理解が進めばどんどん先に進むこともできます。

友達と一緒に学び合うことも、個人で集中して学ぶことも選択できるのです。

このような自立した学びを進めていくと、自分で試行錯誤をしても解決できない場合には、友達と対話を始めたり、友達に意見を求めたりして、主体的、対話的で深い学びの実現へとつながっていきます。

先進校では、「勉強が好きになれる」「自分の学びを知ることができる」「わからなかったらすぐに聞くのではなく、一生懸命自分で考えるようになる」「置いていかれることがないので安心できる」といった声が聞かれています。

しかし一方では、単元の学習内容を確実に履修し、習得することが求められます。

このため数学科では、中間・期末の定期試験に加えて、以前より単元テストを実施して単元ごとの学習状況を評価し、幾度もの再テストと合わせて、学習内容の確実な習得と学力の定着を図っています。

このことによって、生徒は理解できていなかった部分を学び直し、より深い理解につながることを実感するのだと考えます。

また、その日の学習内容や振り返りが可視化されているので、教員は生徒一人一人の学習履歴を見て、何ができるようになっているのか、また、どこで躓いているのかといったことを把握し、個に応じた指導をさらに進めることもできるようになるのです。

このような自由進度学習は、1人1台のタブレットの活用によって、効果的な導入が図られるようになりました。

また、単元テストや再テスト、1月より実施している補習教室などによって、それらを支える体制をつくっています。単元テストの作成や再テストを含めた採点、補習教室の実施などは、教員にとって決して負担の小さなものではありません。しかしそのことを踏まえても、子供たちの個別最適化された学びと協働的な学びを実現し、必要な資質・能力を育成するための取組を進めているのです。

日本では今も、「閉じた教育」を受けてきた大人が多数派を占めています。教室という閉鎖空間で、教科書どおりの答えを学んできた人が、自分も含めて多いのが現状です。

しかし、これまでにないスピードで世界が変わり続ける今日、親世代とは違うスキルが求められる現代の子どもたちに必要なのは、自主的かつ協働的に課題を解決する力であり、自由進度学習は、その実現を目指す教育方法と言えます。

これまでに大きな成果が報告されている自由進度学習ではありますが、教科の特性や生徒の実態によってもその成果は変わってきます。本校においても、本年度の取組を検証し、今後のより良い方策へとつなげていきたいと考えています。